

鮎。釣瓶鮎。

〔毛吹草三〕大和

吉野釣瓶鮎鮎也。枉物ニ入。藤ニテ手ヲスル故ニ云。

〔毛吹草三〕攝津

福島鮎鮎ノ如クフクニ飯ヲ多入タルガ、

〔嬉遊笑覽十上〕飲食攝津名物の内雀鮎江ふな也。腹に飯を多く入たるが、雀のごとくふくるれば、かく

いふなりといへり。江ふなとは、江戸にておぼこといふいなの子なり。後撰夷曲集、ちよこくと

おどれどへらぬ我腹は飯の過たる雀鮎かも、山井はねのはへた飯に漬てや雀すし朔めし意のこ

はきをはねのはへたと云もふるし。五元集五月十日、雷雨永代島の茶店にやどりして、明石より

神鳴晴て鮎の蓋貞享頃の吟なるべし、此句源氏明石巻、雷雨の事をお思ふに今諺に神なりなら

ねば放つまじなどいふ。此句これなるべし。鮎はなる、までは容易に蓋を開かざるもの故、かみ

なりによつて、蓋を開くと作れるなるべし。

〔後撰夷曲集二〕福島雀鮎を

口のうちにはおとの高くきこゆるは喉を飛こす雀鮎かも惠立

〔江戸名物詩初編〕紀伊國屋於滿鮎上横町新道

何歳初開鮎屋店、連綿數代市中鳴海苔玉子鹽梅妙、知是女房於滿情、

〔嬉遊笑覽十上〕飲食文化のはじめ頃、深川六軒ばりに松がすし。出きて、世上すしの風一變し○下

〔江戸名物詩初編〕安宅松鮎御船藏前

本所一番安宅鮎、高名當時莫可并、權家進物三重折、玉子如金魚水晶、

〔江戸名物詩初編〕與兵衛鮎向兩國元町

流行鮎屋町々在、此頃新開兩國東路次、與兵衛客來爭坐二間中、

〔江戸名物詩吉原通鮎〕